

奴隸反乱の宗教的・民族的側面 (一)

—— J・フォークトの奴隸反乱研究を中心として ——

山 本 晴 樹

一、序

二、奴隸反乱の経過（以上本号）

三、奴隸反乱の宗教的・民族的側面

四、結

一、序

従前の奴隸反乱研究は、その多くがシキリア反乱を初めとする奴隸の諸反乱を、古典古代における「階級闘争」の一つとして位置づけた。とりわけ A・W・ミシュリーン (Mischulin)、S・L・ウトチェンコ (Utschenko) がそうである。即ち彼らは、奴隸反乱は、奴隸制と奴隸所有者による「奴隸所有」(Skavenhaltereiigentum) そのものの廃棄をめざす、奴隸「階級」の奴隸所有者に対する「階級闘争」であり、かつ自由への「解放闘争」であると理解した。われわれはこの見解に対しては、前稿において検討を加えた。その際、「階級闘争」説に対する批判の一つとして挙げられたのが、J・フォークト (Vogel) の奴隸反乱研究である。彼は「階級闘争」説を歴史理解の性急な「近代化」として批判し、各奴隸反乱を実証的・構造的に分析する必要性を提起した。即ちフォークトは各反乱を詳細に比較検討した結果、短期間にしかも時期を同じくして各地に勃発した奴隸反乱は、決して連帯的なものではなく、孤立的であったこと、そしてそれは奴隸制廃棄をめざすものではなく、また新しい社会体制をうちたてるものでもなかったことを結論づけた。フォークトのこの指摘は、彼以後の奴隸反乱研究をふり返るとき、きわめて貴重である。というのもフォークトは、奴隸反乱の「階級闘争」としての性格を完全には否定しないまでも、「階級闘争」説の如き形では反乱を決して収れんしえないことを強調しているからである。奴隸反乱研究の再検討が叫ばれる現在、今一度フォークトの研究を取上げる意味も自ら理解されよう。

彼の研究に関しては既に、土井正興教授がその一部を紹介されているが、しかし紹介以上のものではなく、もとよりフォークトの研究の全貌を伝えるものではない。一般にフォークトの研究はその一部をもって代表される

ことが多く、研究史上における彼の位置が明確化されなかったように思われる。それ故、本稿では彼の論文「古代奴隸戦争の構造」(一九五七年)⁽⁵⁾に即して、また彼以後の研究史をも念頭に置きながら、彼の奴隸反乱研究を検討していきたい。その際われわれは、とりわけ奴隸反乱の宗教的・民族的側面を取扱った箇所を中心に考察したい。というののまましくここにフォークトの研究の核心が置かれていると思うからである。⁽⁶⁾

フォークトの論文の構成をみると、Ⅰ原因と誘因、Ⅱ大衆運動と国家行動(Staatsaktionen)、Ⅲ宗教的・民族的モチーフ、Ⅳ戦争行動と盗賊行為(Raubersücke)、プロレタリアの世界運動?となっている。以下この構成のうちⅠ、Ⅱ、Ⅳを奴隸反乱の経過という観点から、Ⅲ、Ⅴを奴隸反乱の宗教的・民族的側面という観点から見ていくことにする。

二、奴隸反乱の経過

まずⅠでは奴隸反乱の原因と誘因が分析される。原因については、反乱と奴隸解放思想との関連が想像されるが、しかしこれは否定される。「当時自由な市民の世界において、奴隸制の廃止を要求する学説は決して知られなかった。」(S. 9)。なるほど当時万人平等を説くストア思想が存在しはしたが、これとても現実の奴隸制にとっては観念論でしかなかった。つまり奴隸の反乱は新しい社会思想(Gesellschaftslehre)には基づいていなかった。従って反乱の原因は他に求められねばならない。即ち当時の政治的・社会的体制と奴隸の状態にある。

これに関して注目されるべきは、当時における奴隸の圧倒的存在、とりわけヘレニズム世界におけるそれでありまたその奴隸のローマ経済への大量流入である。このことによりローマの奴隸制は多大の影響を受けざるをえなかった。奴隸の待遇の悪化がそれである。とりわけ、以前自由を知っていた「新奴隸」(Neusklaaven)と呼ばれる人々は、このような状況に対して不満をおぼえた。ここに反乱の糸口を求めろる考え方もあるが、一層重大な事実としては、農村と都市における奴隸の多数存在が、はからずも奴隸の活動範囲を広げたことであつた。即ち農村においては牧畜奴隸がその労働の性格から武器携帯を許され、主人の監視から遠く離れて活動しており、また都市においては、主人の召使として、あるいは能力のあるものは主人の秘書・代理人・家庭教師等としてほぼ自由人と同様の活動を許され、また彼らは宗教的団体に自由人とともに参加することを許されたのだつた。奴隸に与えられたこのような自由の状態こそまさしく反乱に至る道であつた。

更に一般的な状況において注目されるべきは、国家と社会における市民の側の動搖に起因する国家権力(Staatlichkeit)と非合法組織(Illegalität)との同時存在であつた。即ち、ローマ政府は東地中海地域に進出する際、非合法組織とりわけ海賊を大いに利用した。それ故この地域では海賊が一つの強大な勢力として抬頭した。ローマ政府と海賊という一見奇妙な取合わせが東地中海世界の崩壊にきわめて大きな役割を果たした。このような共存が当時の政治的・社会的体制に多大の影響を与え、いわゆる革命的雰囲気をつくり出したのであつた。

こうした全体状況において奴隸反乱の土壌が醸成されるわけであるが、しかし反乱はそれのみで現実に勃発し

たわけではなかった。各反乱にはそこに至る直接的な誘因 (*anlässe*) が存在したのである。即ち、第一次シキリア反乱は、その地の牧畜・農業・商業において多数の奴隷が使用されていること、とりわけ反乱勃発地エーナにおいて奴隷がケレス神の祭祀への参加を許されていたことよって行動の自由を獲得していたことを背景として、直接的にはエンナの奴隷所有者ダモフィロス (*Damophilos*) とその妻メガリス (*Megalis*) の奴隷に対する苛酷な待遇への報復を契機として勃発した。^⑦ その際呪術師エウヌス (*Eunus*) が反乱の指導者として現われた。彼は自らをシリア女神の使者と称し奴隷の王国を予言したのだった。^⑧ アリストニコス (*Aristonikos*) の反乱においては、アッタロス三世 (*Attalos III*) によるペルガモン王国のローマへの遺贈を契機として、王位僭称者アリストニコスがローマの収奪に危機感を懐き、プロレタリアートと奴隷を率いて反乱を起こした。^⑨ ここでは王の隷属性とローマの貪欲が反乱を引起こしたと言える。第二次シキリア反乱においては、暴力によって奴隷身分に陥った人々に自由を回復させるという元老院議決に従って、シキリアでもプラエトル、P・リキニウス・ネルワ (*Licinius Nerva*) が調査を始め実際に奴隷を解放もしたが、途中で奴隷所有者の圧力によりその調査を中止したために、自由を求めてネルワのもとへ集まっていた奴隷たちは反乱を起こした。^⑩ 即ち、奴隷商人や奴隷所有者の違法行為に対するローマ政府の弱体さが反乱を引起こしたのだった。スパルタクス反乱においては、市民の側における平和の破綻を前提条件として、支配者層の、人殺しのスポーツのために剣闘士 (*gladiator*) を養成するという非人間性、そして農村労働者に集団を形成させるといふ軽率さよって反乱は生じた。

このように各反乱は、一般的な全体状況を背景とした上で、それぞれの誘因によって勃発したのであった。しかし、個々の反乱の誘因には共通するものが見出される。即ち、各反乱を生じさせたものは、奴隸の側の反乱への積極的働きかけではなく、奴隸所有者Ⅱ支配者の側の政治的・社会的動揺であった。つまり奴隸反乱は、その初期の段階はきわめて自然発生的であり、方向性のないものであった。これ以後の反乱の展開過程はフォークトにおいてはⅡ大衆運動と国家行動で扱われている。

Ⅱでは奴隸反乱の大衆運動としての側面と国家行動としての側面が述べられる。反乱を起こした奴隸たちは、その初期の段階では、相互連帯性も統一意識もなく、ただ自分たちへの虐待に対する復讐心から行動した。彼らと対峙するのは、確固たる国家機構であり、市民の統一的な社会であった。それ故奴隸反乱は陰うつな大衆運動にならざるをえなかった。しかしその反乱も初期の自然発生的な段階を過ぎると、様相を異にした。反乱に計画性・政治性が必要とされてきた。それを担ったのが各反乱の指導者である。彼らによって反乱は単なる大衆運動から国家行動へと転換されたのである。

第一次シキリア反乱においては、シリア人エウヌスが指導者として現われた。彼は以前からその呪術と予言とで知られていたが、とりわけシリア女神が彼に王国を予言したと言われていた。反乱を起こした奴隸たちは、この予言に未来を託し、彼を自分たちの王に選んだ。この時点から反乱は国家行動へと発展する。エウヌスは王冠(Diadem)をかぶり、王の徽章と着物をつけ、夫人を女王にし、有能な部下を募って評議會をつくった。⁽¹¹⁾そして自己の周りには一団の親衛隊と千人からなる護衛を配し、彼の宮廷に仕える者として料理人・パン焼人・理髪

師・道化師を置いた。また彼は貨幣をも鑄造した。このような国家はしかしエウヌスの創意によるものではなく、遂一ヘレニズム王国の、とりわけセレウコス王朝の模倣であった。このことはエウヌスが自己をアンティオクスと呼び、彼の部下をシリア人と呼んだことからも明らかである。つまり、エウヌスの打立てた国家には基本的に新たな社会制度は見出されなかった。そこでは、打倒した主人の地位に奴隷が取って代ったというにすぎなかった。それ故プロレタリアートは奴隷の反乱には参加せず、自分自身の利益を追求した。「最初の奴隷国家は明らかに社会の転覆のみをめざしたのであって、共産主義的体制をめざしたのではなかった。」(S. 21)。

アリストニコスの反乱は王位僭称者アリストニコスが支配を求めて起こしたものであった。それはペルガモン王国のローマへの隷属化を契機として生じた。アリストニコスは、この隷属化によって何ら利益を得ることのないプロレタリアートと奴隷に訴えた。とりわけ彼は奴隷に対しては最初から自由を宣言し、反乱の中核となした。しかし、実質的には彼らは王位僭称者の無言の道具であった。彼の打立てた国家は太陽国家(Heliopis)と呼ばれ、その住民は太陽市民(Heliopolites)と呼ばれている。この国家は、その名称から判断して、宗教的・民族的性格をその内部にもつものであるが、実体は不明である。そもそもアリストニコスの反乱自体その政治的・社会的性格は把握しがたいところがある。

第二次シキリア反乱は早い段階で大衆運動から国家行動へと移行した。島の西部において、反乱を起こした奴隷は、呪術師である。サルウィウス(Salvius)を王に選んだ。彼は都市を怠惰と逸楽の場として避け、農村を根拠地とした。⁽¹⁴⁾東部においては占星術に通じたキリキア人アテニオン(Athenion)が王に選ばれた。彼は

最も能力のあるものを兵士とし、残りのものは従来の職に止まるように命じた。また神が彼にシキリア全土の支配を約束したとして、土地を自己の所有物のように大切にすることを命じた¹⁵。つまり彼はこのことによって奴隷に一つの国家を約束し、土地を共有財産にしたのである。ここにはヘレニズム的かつオリエンタ的支配者の思考様式が現われている。東部と西部の両勢力はアテニオンがサルウィウスに服従する形で統合された。そしてサルウィウスを王、アテニオンを將軍とする国家が形成された。サルウィウスは王としてトリフォン (Tryphon) なる名前を与えられた¹⁶。この命名はきわめてヘレニズム的である。また彼はローマ風の着衣をつけ、周りにはリクトルを伴っていた¹⁷。このように第二次シキリア反乱によって打立てられた国家はヘレニズムやローマの模倣という側面が強かった。ただアテニオンの体制における兵士と民間人との区別、共同所有としての土地の取扱いは獨創性が見出される。またプロレタリアートはこの国家に対しては終始距離を保ち、彼らと奴隷との連帯は存在しなかった。

スパルタクス反乱においては、政治的プランは不明である。スパルタクス自身ヘレニズム文化の影響はみられず、理念的なところもみられない。彼は反乱の当初から指導者として現われたが、絶対的な指導者の地位にまでは至らなかった。彼は略奪と殺人とを制限し、戦利品を平等に分配した¹⁸。彼の軍隊においては言わば「戦時共産主義」なるものが行なわれていた。しかし新しい社会秩序を打立てる計画は彼においてみいだされない。彼の目標は奴隷大衆の故郷帰還であり、ローマとの闘争であり、シキリアとの連帯であった。即ち彼にあってはイタリアは戦争の舞台ではあっても、変革に価する土地ではなかった。それ故都市の市民層は奴隷の運動に参加するこ

とはなく敵対的ですからあった。

第一次シキリア反乱からスパルタクス反乱までの各々の反乱の指導者によって打立てられた国家は、以上見た如くその中に新しい社会秩序を生み出すことはなく、制度的には現存する体制の模倣であった。即ちこの国家においては奴隸と主人の地位の逆転が行なわれたにすぎなかった。それ故自己の利益を追求するプロレタリアートはこの国家とは距離を保ち、奴隸と連帯することはなかった。しかし、奴隸反乱によって成立した国家はその存在を主張しようとするかぎり、現存の諸勢力と敵対せざるをえなかった。この側面をフォークトはⅣ戦争行動と盜賊行為で取扱っている。

Ⅳでは奴隸反乱の戦争行動としての側面と盜賊行為としての側面が述べられ、両側面の関連性が指摘される。戦争行動としての奴隸反乱において、軍指揮権は、王と將軍を兼ねていたアリストニコスでは明確に彼に担われ、自己と並んで他に二人の指導者をもったスパルタクスでは、¹⁹中心的には彼に担われたが絶対的ではなく、両シキリア反乱では、周知の如く王と將軍が明確に区別された故に、²⁰將軍であるクレオン（Κλεων）とアテニオンの二人によって担われた。戦争行動の物質的基礎である食料や衣服は敵からの略奪によって供給されたが、一方武器の供給は困難であり、ここでも敵からの略奪品が使用された。ただ第一次シキリア反乱（エウヌス）とスパルタクス反乱では武器の製造が行なわれている。諸反乱のうち、アリストニコスとスパルタクスのみが十分に武装された軍隊を指揮した。各反乱の指導者の戦術に関して、エウヌスとサルウィウスはローマ軍に対してバルチザン闘争を行ない、都市への攻撃では奇襲戦術をとった。アリストニコスは多様な兵力の投入による変幻自在の戦術を行な

った。スパルタクスの戦術はイタリア脱出というきわめて大規模な目的に沿って臨機応変に展開された。その際スパルタクスはバルチザン闘争に軍事的才能を示した。奴隸反乱を戦争行動としての観点からみたとき、味方の計画的獲得、奴隸への扇動、敵の軍隊の解体といった点でプロパガンダの果たす役割は大きかった。この点で特にサルウィウスは都市を包囲した時、中にいる奴隸に対して解放を約束した。これに対抗して支配者側もまた奴隸に自由を約束せざるをえなかった。²¹⁾ 一般に支配者側は奴隸反乱に対しては内部の密告と裏切りという手段をとって切りくずしをはかったが、²²⁾ スパルタクス反乱においてはそれは成功しなかった。このような戦争行動としての奴隸反乱は、それが自由を求めるかぎり絶望的なものにならざるをえず、またそれ故殲滅戦の様相を浴びざるをえなかった。スパルタクスを代表とする反乱指導者のほとんどが戦死しているという事実を²³⁾ みてもこのことは明らかである。

戦争行動としての奴隸反乱も、その指導者がかつて盗賊であった場合、盗賊行為としての側面をもつことになる。とりわけクレオン、スパルタクスの場合²⁴⁾ がそうであった。彼らの反乱には盗賊の思考様式、生活様式が反映されていた。例えば、危険と利益は仲間と平等に分け持つこと、指導者には絶対的に服従すること、などであった。彼らは盗賊行為としての奴隸反乱の中で、権力者に敵対しつつ、正義を求めた。これは「奴隸制の上に築かれた社会における人間の平等に対する本源的な欲求の発露」(S. 45)であった。

以上奴隸反乱の経過という観点から、I、II、IVをみてきた。支配者の側の動揺によりいわば自然発生的に勃発した奴隸反乱は、大衆運動の形をとって進展したが、反乱指導者が登場することによって国家行動へと移行し

た。しかしその国家は既存の体制の模倣にすぎず、新たな原理は見出しえなかった。しかし反乱が国家行動をとるかぎり、現存諸勢力との戦争は免れえなかった。その際指導者の影響もあって反乱は盜賊行為としての側面も持ちえた。このフォークトの指摘は、先にわれわれがみたミシュリーン・ウトチェンコ説²⁵とはきわめて鋭く対立し、その点では新しい奴隸反乱理解と受けとめられがちである。しかし、この指摘に限って言えば、それはフォークトが初めて提起したのではなく、西欧古代史家においてはいわば広く知られていることであった。それ故われわれは、フォークト論文のⅠ、Ⅱ、Ⅳで展開された見解に対しては奴隸反乱研究史上の新たな地平を見出しえない。従って、われわれはやはりフォークト論文の眼目である、奴隸反乱の宗教的・民族的側面の研究を考察せざるをえない。ここにこそフォークトが研究史上一時期を画した所以があると思われるからである。

註

- ① 拙稿「スパルタクス反乱の評価をめぐって―特にミシュリーン・ウトチェンコ説を中心に―」『別府大学紀要』第十九号（一九七八年）。
- ② フォークトによれば奴隸反乱は、前一四〇―七〇年の間に、シキリア、小アジア、イタリア等で勃発した。
- ③ 土井正興「ヨーゼフ・フォークト「古代奴隸戦争の構造」をめぐって」『歴史学研究』第二四三号（一九六〇年）。

- ④ 上記の関して Cf. N. Brockmeyer, Antike Sklaverei, Darmstadt, 1979, SS. 172-179.
- ⑤ J. Vogt, Struktur der antiken Sklavenkriege, Ak.d.Wiss.u.d.Lit., Abh.d. Geistes- u. sozialwiss. Kl. 1957, 1. SS. 48-57. (in: Sklaverei und Humanität, Wiesbaden, 1972, SS. 20-60.).
- ⑥ d. オリヴァ (Oliva) フォークトのこの側面を指摘してゐる。 Cf. P. Oliva, Die charakteristischen Züge der grossen Sklavenaufstände zur Zeit der römischen Republik, 1965, (in: Zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte der späten römischen Republik, hrsg. von H. Schneider, Darmstadt, 1976, S. 239.).
- ⑦ Diod. 34, 2, 10; 34-37.
- ⑧ Diod. 34, 2, 4-9.
- ⑨ Strabo 14, 1, 38. アリストニコスの反乱については、土井正興「アリストニコスの反乱をめぐる諸問題」『法學志林』第六十五卷第二・四号(一九六七—六八年)参照。
- ⑩ Diod. 36, 3, 1-3.
- ⑪ Diod. 34, 2, 16.
- ⑫ Diod. 34, 2, 22.
- ⑬ Diod. 34, 2, 24.
- ⑭ Diod. 36, 4, 4.
- ⑮ Diod. 36, 5, 2f.

- ① Diod. 36, 7, 2.
 ② Diod. 36, 7, 4.
 ③ Appian. bellum civile 1, 14, 116.
 ④ Plut. Crassus 8; Appian. b. c. 1, 14, 116.
 ⑤ Diod. 34, 2, 17; 43.
 ⑥ Diod. 36, 4, 8.
 ⑦ Diod. 34, 2, 21; 36, 2, 6; 3, 5.
 ⑧ スパルタクス以外には第一次シキリア反乱におけるクレオン、第二次シキリア反乱におけるアテニオン、スパルタクス反乱におけるクリクスス (Krixus) / カステス (Custus) / カニキウス (Cannicinus) がそうである。 Cf. Diod. 2, 21; 36, 10, 1; Appian. b. c. 1, 14, 117; Plut. Crassus 11.
 ⑨ Florus 2, 8, 8: Nec abnuit ille de stipendiario Thraee miles, de milite desertor, inde latro, deinde in honorem virium gladiator.

⑩ 註①参照。